

呉服商S家の諸帳簿よりみた衣生活の洋凡化の過程について 一大正後期を対象として一

郡山女大家政科門馬壽子、関口富左、佐原眞聖、和学園短大石川妙子、雁部俊、県立木沢短大徳永繁久

目的 前回まで住民の衣生活を販売者側からの資料によつて考察を続けてきたが、本報では、洋物が地域の人達にどのようにとり入れられて衣生活が洋凡化へ移行したかその過程を帳簿の面から捉え、また衣生活変容の要因としてのS家の商法についても考察する。

方法 大正13年を中心として、仕入れ、萬控帳等の諸帳簿を分析し、公用諸用書留帳よりS家の商法を探り、その他関係文献、聴取り等を参考として考察した。

結果 仕入帳に記載されている商店は「他方仕入」として京阪地方21店、東京、埼玉、越後地方の26店で、「地元仕入」として喜多方を中心にして41店みられた。「他方仕入」の品目は、大阪地方において、サージを始め、キヤラコ、クレープシヤツその他洋物に偏したものが多く、東京地方では、マント、ニヨール、その他ボタン等の附属品で、多種多様の品目が取扱われている。又足袋、洋傘、男女下着類等は埼玉地方であった。「地元仕入」では日常衣料に関するものが多く、洋物はみられない。次に、年間の仕入品目別の衣類では、5月にクレープシヤツを始めとして、夏を迎えるの下着類、11月にはトコビ、マント、ニヨール等の冬物衣類がみられた。毛織物については、男子中学校の制服がきものから上衣とズボンの洋服に変わり布地が多量に取扱われている。以上のことから当地方においては、衣生活の洋凡化は、男子の下着から始まり、次第に女子の下着へとおよび、又表着化へと普及して行く状況がわかった。さらに官史の制服の制定や、又学校の制服着用等にもない一般の人々への定着の姿が捉えられた。当時の不況カードにもかゝらうずる家々代目は積極的かつ、研究的な商法により、地方文化への進展に寄与した状況がうかがえた。